



八代集抄

新古今集端真名序
假名序
四上

特別
イ 4
3163
104(41)



新古今和歌集

二十卷

哥負八重玄子九百八十八首。萬葉并吟古今并
皆不吟

元久二年三月廿六日後多頼院乃院宣よりて。
系議大束乃皆通具。大荒乃有家。大近中將定家
前上総公家陸大乃將雅經撰進より。寂蓮撰者
より入とつども。奥院のより平とす。と奇ハ
上皇法合とありとく定らる。と故より席より敵策
乃より又ゆき。高名席ハ就經。後主極殿の作せ
によりく出之。や席ハすまのち極殿殿し。いや極殿
も

定家建仁元年明月記長房曰十一月三日中女奉書上古已後和哥
可撰進者スミヤク此事被仰御所寄人ミミ

元久二年三月竟高ミをなとあり。承元二年六
月セ施行ガすゞきののり作らるひはれた或止ま
或ハ娘ミく今明月記略記隠岐乃と上皇乃
改め直ミさせミよう則上皇乃清興ミとあら
定家おお云物案野宮今い多子帝とくミとあら
羅乃表帝ミとくミとあらミとあらミ
き思とくミとあらミとあらミとあらミ
定少ミとくミとあらミとあらミとあらミ

いれて奏晚ミとくミとあらミ

撰者

通具ハ土御門内大臣通親公母平通國女号福の
定家おお云物案通具朝臣乃号福の
ことミとあらミとあらミとあらミとあらミ
持政殿ミとあらミとあらミとあらミ
有家ハ大式重家母左京大夫号福の
お云有家おお云物案通具朝臣乃号福の
を持とくミとあらミとあらミとあらミ
定家ハ後成ミとあらミとあらミとあらミ

遙く西より来られたる。されど、さうもなれども人
 誰といふ事なく、さういふの素になつて物をあはれしむる
 ちのづかやきぬびり。それとて、さういふ月氣
 のよなる。民のはたさめさうかぶらびさへも、今もわ
 りなきなりとのをゆるよし。なすゑぬようふおあり
 定家^{サニ}が室^{ハダイフ}内府^{ゾタレン}へ福進^{ホクシン}乃出^{ノデ}とも。ちねえ久々の此位者
 糸井^{イトイ}の時^{ナチ}汝^{アミカ}月明^{ツキアカリ}なりとよう。き靈夢^{レイム}と國^{カン}傳^{デン}
 一に上り。家風^{ソノ}より仲人^{ナナ}こめり。明月記^{メイゲキ}を著^{サク}り。玉
 子^{コノエ}も、さういふさうわさといひます。
 徹書記^{トウシキ}地持^{ヂモチ}も、尋^{ヒロ}なり。まゝく定家^{サニ}と新^{ニホ}せん。

冥^{メウカ}か^カもあ^カる^カべ^カく^カず^カ。 爵^{キョウ}を^カも^カか^カつ^カる^カべ^カく^カず^カ。
 又云八月廿日ハ定家^{キニチ}乃^カ忌^{キニチ}月^カハ^カわ^カが^カ幼^{ヨウ}生^{ショウ}れ^カハ^カ初^{ハツ}め^カあ^カら^カず^カ。
 う^カく^カけ^カ月^カハ^カ吊^{トハラ}ひ^カう^カう^カこ^カを^カよ^カめ^カれ^カこ^カ。 又云定家^{キニチ}の^カ
 哥^カハ^カ志^カ入^カと^カく^カこ^カも^カ身^カ小^カあ^カり^カう^カち^カく^カ。 流^{ユウ}傳^{デン}ハ^カ定家^{キニチ}
 ハ^カ世^カと^カ乃^カず^カい^カき^カハ^カ無^カ乃^カあ^カこ^カ家^カ傳^カと^カと^カも^カや^カり^カ。
 凡^カれ^カも^カう^カ事^カハ^カう^カい^カ乃^カう^カこ^カこ^カと^カも^カあ^カら^カず^カ。
 井^カ陸^カ抄^カ云^カ。 お^カ世^カと^カ定家^{キニチ}ハ^カ義^カ親^カと^カう^カく^カこ^カう^カこ^カに^カ
 云^カ旨^カハ^カ中^カ録^カと^カ大^カ概^カ抄^カ云^カ凡^カ二^カ条^カ家^カの^カる^カを^カ習^カふ^カと^カ
 云^カ。 京^カ極^カ黄^カ門^カ定家^{キニチ}の^カや^カと^カれ^カう^カう^カを^カ幸^カと^カす^カと^カ
 あり^カ。 定家^{キニチ}ハ^カ只^カ古^カ今^カを^カ本^カと^カこ^カう^カく^カけ^カる^カを^カ幸^カと^カす^カと^カ

同百人一首抄云新古とをみ人うかせく標きりなり。
然り定家六条後人等より父乃喪りことわりあり
り。さうよりよみて各乃撰再乃鉢彼口のやうなつど
をなむむき明月記より粗くあり

心敬私語云定家つ丹を東^イなるよびんをくけ直^ナ
 衣をま^イわ^キるけ^イも威儀をま^イあ^キるらん
 又云定家つ乃丹の密ハ勝月夜ハ仙女乃なりけ^ハ
 り何^ハつれなくき^ハうせ^ハらん句^ハい^ハも^ハも^ハし^ハで^ハん
 おらん又云定家つ父傳成つる我あれさあを^ハ思^ハ
 りあるひ^ハ一^ハ夜^ハよ^ハわ^ハが^ハあ^ハ三^ハ十^ハ乃^ハは^ハあ^ハく^ハハ^ハや^ハう^ハな^ハ

口乃舌とあるを以て寫すに尋ねるに作らざる。世乃
 をわれとまつるやうな作。世乃はわの骨とあるは
 えんある。こゝをわと見て作。さるゝやうにの
 人乃舌と入るす。そゝに知ぬ我をたよとある
 にあわゆるぬゝとある。さるゝ作。後行をより作
 ぬゝとある。涙を流すなりと。後行をより作
 たりとある。ゆゑに世乃舌を思ふとよとある。さ
 りとある。わの骨より、流すゝとある。わの骨を思ふ
 たりとある。我の骨のぬゝとある。肉をのふとある。世乃
 天然と骨をいふ。世乃の骨より、わの骨とある。世乃

はきりぬ。末代より貴殿にありてよふにあはじ
きくぞよ。而れハ付属志を也といひて二重の
哥合を授け、上げし彼等重代はつぎさる方なり
ら新古今乃撰者よと云々。定家つよはづいし名
をのこせしものなり。事く様やは多ね院
よりして再乃るればたあやうなるふは多ね殿よ
中合せしことなる。被敷巻させまひくるは家隆ハ未
代乃人丸もくい也。かきり再をたまひせまふべしと戸
させまひたり。これをもあすなり。上人のおせし事
々々。さういふあつてわくさでいへてそく傳也

又云松殿信正の赤痢をたもつやみくまう
志貴乃民安シギノタケノタケノにりまてこれの信正をたあげてせり
かうりけある鬼神信正をよびけく、八月の十日
あまわ乃みれそははまうくする月まけを
よりりくるをそく、夏さめてほ病をあらふね
そ家陸つ乃建保乃と九月十二夜に裏首首の心れ
河内乃尋じかりつめうに徳天を納受とふよう
不思議のもし署記又云家陸つ八十あく天とちて
とつち多い一時亡首れ尋をよく廻向せまう
内り、葵とあれば難波の里よどりまうはの入日

とがひたるは 以終に念ふ

徹書記物に密啓に記してあるもの、凡そ
よりりし定家八執一筆に記するや、新撰撰より
密啓よりいふか、いふれは、密啓の筆に
あり、但し、七宝鉢のありて、子孫よりいふ
さういふ、あつたが、いふ

雅証刊部に記し、定家乃の、かゝるに代に皆
井祖歌鞠、言百人一首、あり

徹書記物に、雅証に定家乃の、かゝるに代に皆
二系家乃の、かゝるに代に皆

この云字より、かゝるに代に皆、雅証に定家乃の、かゝるに代に皆
いふ、あつたが、いふ、二系家乃の、かゝるに代に皆

新古今集の事
定家乃の、かゝるに代に皆、雅証に定家乃の、かゝるに代に皆

は、普光母院近代凡そ、新古今集の事、雅証に定家乃の、かゝるに代に皆
いふ、あつたが、いふ、二系家乃の、かゝるに代に皆

何なりて事をし集を携ひてまゝ可なり何んぞ百六代
乃今き事とあり
九
彼上古之萬葉集者
是より集撰者五人
之作付らるるなり
之り編次之起因准之
後之萬葉乃編次り
之りある事とあり
之りある事とあり
乃今き事とあり
乃今き事とあり

彼上古之萬葉集者蓋是和歌之源
也編次之起因准之儀星序惟邇煙
將難披延喜有古今集四人合編
余而感之天曆有後撰集五人奉
絲言而成之其後有拾遺後拾遺
金葉詞華千載等集雖出於聖主
數代之勅殊恨為撰者一身之取
因茲訪延喜天曆二朝之遺義定

初志序云

陶子りて事をし集を携ひてまゝ可なり何んぞ百六代
乃今き事とあり

九
彼上古之萬葉集者

是より集撰者五人

之作付らるるなり

之り編次之起因准之

後之萬葉乃編次り

之りある事とあり

乃今き事とあり

乃今き事とあり

乃今き事とあり

乃今き事とあり

法河步虛五輩之英豪排神仙之居
展刊修之席而已

法河步虛月日中客とあり法河山堂肆考云春秋漢合掌三公歌

五嶽九神法河海步虛三赫詩注云異苑云陳思王遊魚山忽聞宮裏

有誦經色清遠寒亮便解音者寫之為神仙之聲道士勅之作步虛

此步虛之始也韻府云此聲備言衆仙縹緲輕舉之美

五輩英豪

中勝万人異豪英也通具足是也

通具足是也

通具足是也

通具足是也

通具足是也

排ハ神仙之居ヲ院中を仙洞とすは本院集と云ふに止めぬなりと
より刊候いかりなきむしやい集乃ちあてゝいかりなき本とせむよし
へるも刊削也又概木也

十

斯集之爲體也先抽萬葉集之中更拾

七代集之外ツクネチ深索而微長モクナシ無遺モクナシ廣求ツクネチ

而片善必舉雖強網於山野微禽自

逃雖連筌於江湖小鮮偷漏誠當視

聽之不達，定有篇章之病，遺今只

隨採得且所勒終也

そとより見ゆは集ふて一宮

新出序七

多々所

網を野ざしそりてわづらふとすれどあにさし
しるのゝとこ釜莊子云釜所以取魚得魚而忘釜也と

小鮮老子經乃字之に於て之を以て指其片善の事なり
 之を以て小鮮とすしと曰ふ視耳より聴きより之を以て視聴の

幸月生之
 世に及ぶ
 丹乃とれ
 今共随採得

六也と視候のなりとより候ふ事とて下
 聖刊也天候の言訣 土 聖也とて聖

柳於古今者不載當代之御製自後

撰而初如其時之天章各考一部不

満十篇而今所入之自詠已餘三十

首六義若相兼一兩雖可足依無所

骨之絕妙還有露詞之多如偏山耽

一と之天章ハ所製と
道之思不顧多情之眼

不獨託仙洞

十四

無何之鄉ニ莊子ソル

逍遙遊篇云何不

之於無何有之鄉

造化自然至道

之中自有可樂之地

不獨^ス記^リ仙洞^{ノミヤ}無何^ニ之^ニ卿^{ルヲ}有^ニ朝^ル風^ニ柔^ニ月^ニ之^ニ
真^ス亦^ス欲^ス呈^ス皇^{ミカド}家^ノ元^ニ久^ク之^ニ宗^ニ有^ニ溫^{アル}故^ニ如^ス新^キ
之^ニ心^ニ修^ス撰^ス之^ニ趣^ス不^ス在^ニ茲^{コニ}乎^ヤ千^{トキニ}時^ニ聖^ニ曆^ニ乙
女^ニ王^ニ春^ニ三^ニ月^ニ云^ス今^ニ

真帝ミマツ天皇ミマツ久安コニヤ年トキニ不フ治シ

之心修撰之趣不在茲乎平時聖曆乙

丑王春三月云今

ニカイフ

也。といふ仙洞の事、今ほまゝとてしりぬ凡そ月ハ月力としてあうひ舟
よりその心せ皇家の當今乃ゆきも温故知新に語流乃語る
延喜古今集乃古きをとりをくわゆる今世なりとも非を知くは撰
集なりきるをとりえんときくこそいへ河野古今集乃九月のべをこめ
てある一白氏文集ニ不独記東都履道里有闲居恭適之選亦今知
皇唐大和成有理世安樂之音といふ文林を字せり終撰之趣といふ
は集撰より主題とし不在茲乎論諸乃寧く聖曆に當代乃寄をよめ
といひつゝ元久二年におあり王春に春秋り又さとお著のもの

集

下
白氏文集

皇唐大和歲有_二理_一

集撰之主題と

乙巳年元月二年

新文序
九

假名序

八重寺物語古今席八冊乃服部氏ハ不_レ及_二子_一細_一

後拾遺子載有之乃序ハ首尾

かきあひく 鋼つきむ神あまのくさくさなり

明月記曰建永二年三月十九日沐浴午時討有召之由清鞠示之

未時校病叅上給御製三首拜見此事新定序以集中并

被載其部ニス文乞件ヲ以上古作者ヲ用之其中ニ文ハ流々トシ

神あり山なりとあり件、哥赤人、哥之入後撰之由

秋宮内に見出作者替不覺悟也此是告下官人等其時儀定

可改席シカムラ飲又雖戴席ノスト可不書ニキカル比并ニ次去年事ラ名刃キレ比春帝幸ス於ス

序更不可被改一字又被序并其部討者心可遺不害樂

集之時撰者或曰直古乎方之反自詠你讀人不知入之建別也象

此事神ヲ多ク乃ハ多ク乃ハ公ノ力ヲ所ニ有ル評ヲ被シテ入リ評ヲ制ス

才之儀也此更有勅許云

あり人の世はまゝわき
 乃る國のまゝなり
 風俗今やしき
 ありけり 男女の
 中をやりける身
 房中乃るまゝなり
 世をわきまを 和算
 教誡之端と古今乃る序ありけり
 事勿端し亦和算の理世極民乃二種のり
 世と世をわきまをとりける詩乃周南召南と國門鄉黨邦
 國より用て天下を化するゆへんことなり

さうわいあうのあれい
 ゆうきくううううう
 さうのうううう 世をわきま
 民をうううううう

三原撰集

三原撰集

とき代の帝とい
 ありの帝代万葉集
 延喜乃古今て廣
 は撰集乃至乃
 何代の万葉集と
 ありたのこれ

も家々乃りてはういゆ
 くれ花のなる本ものなり
 あり乃るなりなるなり

せ乃海はまゝなり
 世のまゝなり海はま
 法のほうしなり
 やけも人貝や拾人
 ありなりんば

ありいありいあり
 乃ありいありいあり
 ありなりねきけい

一、
 乃るちゝおまゝかゝ
 我まゝに申さるゝは、
 五段は集の、
 これよりわけて、
 大花つゝ原、
 長定家前上、
 が将右原、
 いよとあつち、
 人をまゝに、

初序土

乃こも乃ちてうも玉の夢はほ
 しくももももももももももも
 わくはつめむ
六段上皇御歌
 まあくえいひしそまももももも
 まひも乃ちれひもももももも
 乃ちれえいもももももももも
 の下根れ今れるうももももも
 乃ちち乃ちもももももももも
 玉乃ちもももももももももも
 乃ちれもももももももももも

花びらもついでに
わさび花びらのね
にさわさわの花
はなもつたのね
仙洞のふり柳は白き
花びらにふりまの
こころのふりまの
はなもつたのね
さくらもつたのね
ひまわりもつた
万葉集の 一集
さくらもつたのね
集まう七代のま
ふけく万葉集
のうらやまの集

とらふらふらふら
わくわくわくわく

七代集万葉集七代集
万葉集の 一集
さくらもつたのね
集まう七代のま
ふけく万葉集
のうらやまの集

万葉集の 一集
さくらもつたのね
集まう七代のま
ふけく万葉集
のうらやまの集

万葉集の 一集
さくらもつたのね
集まう七代のま
ふけく万葉集
のうらやまの集

万葉集の 一集
さくらもつたのね
集まう七代のま
ふけく万葉集
のうらやまの集

乃古よりわたりて天下乃ち上げさる事わざとほ名お院のけつる初めなり
増鏡第一なり乃ち下乃ちまよは名お院のけつるなり事なり世をまろ
めなり今もわたりていふなりとていふなり
よる乃ち民衆目野のまよはいなりとて 万民をまよは名お院のけつる
なり

上より海 四海東方美雲くくしありやんや吾朝おる事やとけ
 此ハその心とやまふとて秋は鴻日本乃名に神武天皇は玉乃形を結
 出乃くくしとてのまふより名けとて日本紀よりなり 万民四海
 穀量と對一春日野 秋は鴻も秋の字と對一まふと對り出まふ
 わ乃くくし此をるねや 民乃のまふ玉乃のちれハ延喜天曆也
 乃和奇感也 世の此をるねくくしを認ひ其を據せまふとて同い
 わ乃くくし此をるねとてのまふを正るる曆のせとてまふよりなる事
 乃知るまふは撰の此をあふとてあふみ人乃とてかをさめくまふとて
 まふくくしむとてまふ知る 十一段は集撰をさふ故
 まふとて此さたり 乃万葉はくくし乃子とてまふなり

十一 昭以集釋之為人故

かろ万葉うゝ乃ちもとまり時うつり

万葉にうゝの千もの
可なりむを撰集の根
源なれども時代より
序よりとくも撰点
乃ね今よりうゝこと
延喜よりいへるなり
け撰をひたすなり
乃集りて多し
拾遺いたしては撰
ところといふ序の事
ハあるなり撰と
いふことありや
ぬやいふことあり
況んや拾遺を撰あ
る人のよりいふ集

ことといふは、今の人を、
延喜乃い、その今、
左、集を、
今といふ人、
め、
葉、
これ、
又、
古今、
み、

